

[コメント 1]

## 多文化国民統合とグローバル化

### 多和田報告へのコメント

中野耕太郎  
(大阪市立大学)

大阪市立大学文学研究科の中野です。多和田先生のご報告に関して、質問も兼ねて若干コメントさせていただきたいと思います。私は昨年、COE-Aチーム「歴史遺産と都市文化創造」の第1回のシンポジウムで、カナダのバンクーバー市を取材・調査して、「多文化都市バンクーバーの文化遺産」というかなり近いテーマで報告をいたしました(註1)。その関係で、今日のお話は特に興味深く拝聴いたしました。昨年の私の調査では、主として中国系の移民がカナダの地で有形、無形の文化財を新たに創出していくという問題を取り上げました。こうした文化創造が少数者にとってのアイデンティティ形成において重要であるばかりでなく、バンクーバーという自治体やカナダ政府にとっても、多文化主義を承認し、多様な文化集団の活動に公的支援を行うことは、福祉国家的な国民統合の一環として前向きに捉えられていると報告しました。

今回、多和田先生からマレーシア多文化主義の報告をお伺いして、そこにカナダのケースとある種類似た構造が機能しているとの印象を受けました。またマレーシアの場合は、一見特異な国民形成の事例にも見えるわけですが、「土着」文化なるものが強調される点で、よりオーソドックスなナショナリズムの存在を感じました。アンソニー・スミスという学者は、近代のネーションは本質的には自由な市民共同体だが、常にある種の原初性を偽装していると述べています(註2)。多和田先生のお話では「マレー民族」という括弧つきの

「ネイティブ」が、ポストコロニアルなマレーシアで仮構されていて、それが植民地時代から存在する実に多様な人口にもかかわらず、ひとつの「国民文化」を構築できるという信念の拠り所となっているようです。

一方で、国民の文化的多様性が退けられない点も重要だと感じました。マレーシアで暮らす一人ひとりの国民は現実には、特定のエスニック文化集団の中で育ち、その文化の担い手となっていきます。そうした文化的なサブ・カテゴリーとしてのアイデンティティーを承認することは、たとえ「土着文化」との距離にしたがって明確な序列があるにせよ、諸文化集団の国民国家への有機的な包摂を実体化するものといえるでしょう。ここでは、「伝統」や「文化」は、それが本当に古いものかどうかは別として、二重の意味で——つまり、ひとつの「国民文化」を表象することと、ローカルでエスニックな民衆の帰属意識に公的性格を与えることの両面で——、国民統合の媒体として機能しているようです。そうした意味で、今日御紹介いただいたマレーシアは多文化主義に基づく国民国家形成のひとつの典型例であり、また、その首都クアラルンプールはそうした政策の生き生きとした実践の場だという風に承りました。

ただ、御報告の最後で指摘された近年顕著な「イスラーム化」の傾向については、これまで見てきた議論の文脈にどのように位置づければよいのか正直言って戸惑いを感じます。たしかにイスラームは長く国民文化の基礎の一つとして位置づけられてきたものです。しかし、同時にその普遍宗教としての性格や世界規模で拡大している「復興運動」の展開を考えると、現在の「イスラーム化」現象は、マレーシアという一つの国民国家の枠組みを超えた動きと見るべきです。こうした国境を越えた政治、文化、経済の展開と多文化主義はどのような関係にあるのでしょうか。この問題は昨年の私自身の報告でも悩ましい問題でした。実は、バンクーバーで自文化の保存や創出に尽力している中国系住民の多くは、月に何度も香港や日本と北米を往来するような国際人でした。そうした人々の多文化主義をカナダという国民国家の中だけで考えていていいのだろうかと思問してきました。

今日、いわゆるグローバル化の進行の結果、国境を越えて世界を覆う括弧付きの「帝国」と呼ばれる文化システムの出現が話題となっています。この議論の詳細をここで論じるつもりはありませんが、いずれにしても国民国家を超えた **21** 世紀の状況の中で、アイデンティティーの表象としての「文化」はどのような政治的な意味を持とうとしているのでしょうか。今や多文化主義は多国籍企業のグローバルな支配を支えるイデオロギーとなった

というのは極論だとしても、都市やローカル社会の多文化構造は、現在進行形のグローバル化状況とどのような共犯関係にあるのでしょうか。今日御紹介いただいたマレーシアでは「イスラーム化」が今日的現象として現れています。いうまでもなく、このイスラーム復興運動は資本と情報のグローバル化への世界規模の対抗軸とみなされています。だとすれば、マレーシアにおける文化遺産や文化創造がイスラーム化していくという問題は、従来国民統合としての「多文化主義」とどのように関係しているのでしょうか、あるいはこうした現象は、「グローバル化」という問題の中でどのように考えていったらよいのでしょうか、お伺いしたいと思います。

## 註

- (1) 中野耕太郎「多文化都市バンクーバーの文化遺産」大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター編『歴史遺産と都市文化創造』、2003年12月、45～72ページ。
- (2) アンソニー・D・スミス『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』巢山靖司・高城和義他訳、名古屋大学出版会、1999年